

# ユーモアと Misspelling

林 幸子

## はじめに

Misspelling, 誤字, あるいは綴り違いという言葉は, 過失や不注意から綴りを間違えるという印象を与える。しかしここで取り上げるのは故意の綴り違いである。まず19世紀半ばに活躍したアメリカのユーモリスト Charles Farrar Browne の短編 “Woman’s Rights” の一部を引用してみよう。

I pitcht my tent in a small town in Injianny one day last seeson, & while I was standin at the dore takin money, a deppytashun of ladies came up & sed they wos members of the Bunkumville Female Moral Reformin & Wimins Rite’s Associashun, and thay axed me if they cood go in without payin.

“Not exactly,” sez I, “but you can pay without goin in.”<sup>1)</sup>

協会の代表者であるという権威を振りかざして, ただで見せ物小屋に入ろうとした女権運動家に対し, 「払わずに見ることはお断わりだが, 見ずに払うことは一向構わないよ。」と軽く相手をかかわす見せ物小屋の主人のユーモアが, 小気味よく描かれている。しかし読者にとって最も印象的なのは, 何ととっても全体の半分近くを占める妙な綴字ではないだろうか。引用文中より妙な綴字を取り出してみよう。(括弧内は正しい綴字を示す。)

Injianny (Indiana), seeson (season), standin (standing),  
dore (door), takin (taking), deppytashun (deputation),  
sed (said), wos (were), reformin (reforming), wimin (women),

rite (right), associashun (association), thay (they), ax (ask),  
cood (could), payin (paying), sez (says), goin (going)

一見、作者の誤りではないか、勘違いではないかと思える程におびただしい妙な綴字に対して、Walter Blair は“cacography”という呼び名を用い<sup>2)</sup>、Brom Weber は、“misspelling”という表現を当てている<sup>3)</sup>。また、bad spelling, phonetic dialect, eye dialect 等の呼び方もなされている。

“dialect”であるとするなら、方言、俗語の辞典類には取り上げられているのであろうか。先に挙げた 18 語のうち、standin 等 4 語は、語尾の [in] 音が [n] に変化したもので、極一般的な方言形体であるため、また ax は、一般辞書にも記載されている音位転換の代表的な俗語であるため、除いて考える。残り 13 語について、方言、俗語の観点から、4 種の辞典における記載の有無について調べてみた。4 種の辞典とは、*A Dictionary of Americanisms* (M. M. Mathews, 1951), *American Dialect Dictionary* (Harold Wentworth, 1944), *Dictionary of American Slang* (Harold Wentworth, 1967), *English Dialect Dictionary* (Joseph Wright, 1970) である。見出し語として記載されているものは皆無であり、さらに *O. E. D.*, Webster 系の諸辞典においても同様な結果であった。

ということは、これら妙な綴字の多くは、方言、俗語とは別な領域のもので、方言という概念が含む地理的、階級的要因を示すものというより、むしろ、作者がある特別な意図のもとでことばを操った結果である、とみなすことが自然であろう。

さらに、これらの綴字の多くは、アメリカにおいて 19 世紀半ば頃から頻繁に用いられるようになったものの、19 世紀を代表する作家 Emerson, Poe, Hawthorne, Whitman, Melville 等の作品にはほとんど見られず、Browne らを中心とするユーモリストのあいだで広く用いられていたことも見逃せない。というよりも、ユーモリストのユーモア追究の工夫の結果が綴字の上にも表れたといった方が適当かもしれない。綴字を利用したユーモアの出現について、Blair は次のようにまとめている。

This new, wild emphasis upon verbal comedy brought

into being some comic appeals previously little developed. Such acrobatics of language are of course, in a sense, burlesques of language; and in burlesque particularly these writers excelled. During this period, dialect humor... blossomed as never before<sup>4)</sup>.

19世紀アメリカのユーモリストたちは、何を求めて妙な綴字を多用したのだろうか。それはユーモアとどのような結びつきを持っているのだろうか。そしてユーモリストたちの頂点に立つ Mark Twain の作品にはいかに反映しているのだろうか。ユーモアとの結びつきを中心に、妙な綴字の意味を追究することが本論の目的である。

### 1. 妙な綴字の使用者たち

19世紀のアメリカ文学の世界には、Emerson, Poe, Thoreau, Hawthorne 等を中心とする、アメリカン・ルネサンスの主流のもとに、ユーモアという趣きの全く異なった潮流が渦巻いていた。フロンティアラインがカリフォルニアにまで達し、さらにゴールドラッシュという歓喜も重なって、カリフォルニアを中心に、国内には陽気な雰囲気が出ていた。数々の盛衰、失敗、失望はあったものの、喜劇的なもの、楽しいものへの関心が急激に高まり、新しい町や金鉱採掘キャンプ等を中心に、無名のユーモア作家が次々と誕生していった。彼らは、地方を巡ってユーモラスな講演活動を盛んに行い、知的娯楽ショーとして人気をさらった。1シーズンで100回の講演をこなし、5万ドル以上の講演料を得た者も出たという。さらに各地で生まれた penny press と呼ばれる地方小新聞に、ユーモア溢れる記事や短編を連載し、個性豊かなキャラクターを生み出していった。

代表的なユーモリストの名と、彼らが創造した主人公の名前を挙げておこう。

[ユーモリスト]	[主人公]
Seba Smith	(1792-1868) Jack Downing
Augustus Baldwin Longstreet	(1790-1870)

William Tappen Thompson	(1812-1882)	Major Jones
George Washington Harris	(1814-1869)	Sut Lovingood
Johnson Jones Hooper	(1815-1862)	Simon Suggs
Henry Wheeler Shaw	(1818-1885)	Josh Billings
James Russell Lowell	(1819-1891)	Hosea Biglow
Charles Henry Smith	(1826-1903)	Bill Arp
David Ross Locke	(1833-1888)	Petroleum V. Nasby
Charles Farrar Browne	(1834-1867)	Artemus Ward

彼らの人気は洋の東西に渡り、Browne は、ロンドンにまで講演旅行に出かけ人気者となった。Lincoln 大統領に重用される程の彼らの人気の高まりを、Weber はやや大仰に評価している。

Emerson, Whitman, Longfellow, Holmes, Melville, Lowell, Whittier, Hawthorne, and other important contemporaries of Ward had already published some of their major writings by 1860. Nevertheless, it was Ward, rather than any of these men, who was read enthusiastically from the Atlantic to the Pacific, who attracted large audiences in a Western village or an Eastern city when he appeared on the lecture platform.<sup>5)</sup>

(ここでいう Ward とは Browne のことである。)

大人気を博した19世紀ユーモリストのほとんどが、先に見たような妙な綴字を多用している。中でもとりわけ目立って用いているのは、Shaw, Locke, Browne ら、19世紀後半に活躍した literary comedian (文学的コメディアン) と呼ばれるユーモリストたちである。そこで三者の作品を一つずつ取り上げ、そこに見られる妙な綴字の傾向を確かめてみることにする。Shaw の作品からは“Live Yankees,” Locke の作品からは“Letters of Petroleum V. Nasby,” Browne の作品からは“Woman’s Rights”を選んだ。“Woman’s Rights”については冒頭で言及済みであるので、ここでは他の二作品の一部を引用しておく。

## “Live Yankees”

Live Yankees are chuck full of karakter and sissing hot with enterprize and curiosy.

In bild we find them az lean az a hunter's dorg, with a parched countenance, reddy for a grin, or for a sorrow; ov elaastick step; thortful, but not abstrakted; pashunt, bekauze cunnin; ever watchful; slo to anger; avoiding a fight; but rezolute at bay.<sup>6)</sup>

## “Letter of Petroleum V. Nasby”

I see in the papers last nite that the Government hez institooted a draft, and that in a few weeks sum hundreds uv thousands uv peeceable citizens will be dragged to the tented field. I know not wat uthers may do, but ez for me, I cant go. Upon a rigid eggsaminashun uv my fizzleckle man, I find it wood be wus nor madnis for me to undertake a campane, to-wit:<sup>7)</sup>

内容について簡単に触れておこう。前者では、外国旅行に出かけても、美しい風景に見とれるどころか、ピラミッドの値踏みを始めるヤンキーの現実主義が滑稽に語られている。後者では、戦争に参加したいのは山々だが、体調が芳しくないので参加を断念するという Nasby の言い訳（頭がはげていてかつらが必要であるため、ふけ症であるためなど）が、面白おかしく描かれている。

三編それぞれにテーマが異なるため、用語にはある程度の差が見られる。しかし sed, sum, wood など三者に共通する綴字からみると、彼らは、発音と綴りを一致させるという目的で、こうした綴字を考案したと判断できる。そこで、音と綴りの関わりを基準に、三者の用いた妙な綴字の代表的なものを分類してみた（表 1, 表 2）。（発音表記には、国際音声記号を使用した。）

各々の文章の長さは、“Woman’s Rights” が 600 語、“Letters of Petroleum V. Nasby” が 360 語、“Live Yankees” が 700 語と、非常

[表 1] 標準発音を示す綴字

発音	綴字の変化	例 ( )内は正しい綴字
[i:]	ea } ie } → ee	beest (beast) beleeeve (believe) leevee (leave) peece (peace) seeson (season)
[e]	a } ai } ay } → e ea } ie }	enny (any) sed (said) sez (says) hed (head) frend (friend)
[ʌ]	o → u	anuther (another) dun (done) sum (some) uther (other) wun (one)
[u] [u:]	oul } u } → oo	cood (could) wood (would) Joon (June)
[ou]	oa } ow } → o	bote (boat) slo (slow)
[k]	c → k	bekauze (because) karakter (character) kollor (collar) kotton (cotton)
[v]	f → v	ov, uv (of)
[z]	s → z	as, es (as) dezire (desire) hez (has) hiz (his) iz (is)
[ʃən]	sion } tion } → shun	impreshun (impression) associashun (association) deppytashun (deputation) eggsaminashun (examination)
	gh をとる	nite (night) rite (right) thortful (thoughtful)
	その他	be4 (before) blew (blue) dore (door) henso4th (henceforth) wimin (women)

[表 2] 非標準発音を示す綴字

語尾の [ə:] 化	shadder (shadow) umbreller (umbrella)
[u:] と [ju:] の交換	dew (do) tew (two, too, to) buty (beauty) nu (new)
[r] の挿入	darter (daughter) dorg (dog) orffiser (officer)
その他	allus (always) critter (creature) furrin (foreign) natral (natural) tother (the other)

に短いものである。しかしそれぞれおよそ 120 語, 60 語, 100 語の妙な綴字を含んでいる。その割合の多さには啞然とするほどである。このうち、辞典類に記載があるのは、非標準発音の語のうち、darter, natral, tother など数語にすぎない。標準発音の語については、沢田敬也氏著『アメリカ文学方言辞典』(オセアニア出版, 1984) に、sed, wimin, blew などが eye dialect であるという説明が記されているだけで、他の辞典類における記載は皆無である<sup>8)</sup>。

便宜上の分類を試みたが、これ以上の音声学的アプローチ、及び方言としての分析にはあまり意味がないように思える。なぜなら、第一に、単一音に対して単一表記という方針が完全に貫かれているわけではないし、第二に、同一作者が、ある時にはニューイングランド方言を用い、またある時には南部方言をとという具合に、ことばの地域性が一貫していないためである。

これらの綴字は、ある個人の発した音をごく自然に綴字に再現させたものなのだ。つまり、方言であるなしにかかわらず、実際に聞こえた通りを、標準的な綴字を無視して、文字に投影し表記した結果なのである。[rait] という発音の語に“gh”は不要であり、[z]の音を表記するための綴字は“s”ではなく“z”でなければならないという考え方なのだ。本論では、これら妙な綴字に対し、音を意識したために故意に作られた誤字であるという点から、phonetic misspelling という呼称を用いたいと思う。

## 2. phonetic misspelling の意味

phonetic misspelling の使用者がユーモリストであることを考えると、この誤字には思いのほか多くの威力が備わっているように思える。

第一に、それは視覚的ユーモアを生み出している。初めてユーモリストたちの作品を目にした時、読者は目に写る綴りそのもの (appearance) に、単純に面白い、奇妙だ、という強烈な印象を受ける。特に Browne が用いた “be4” “henso4th” (他 there4 もよく用いられている) という数字を含んだ綴字は、Blair の表現を借りるならば、まさに「ことばのアクロバット」であり、実験的なショーでもあるかのように当時の読者の目を引きつけたはずである。そして現在でもその効果は失せていない。元来 vernacular を売物としていた19世紀のユーモリストたちにとって、またそれを求めていた読者にとって、目に直接訴えるユーモアは不可欠なものであったにちがいない。

ただし、19世紀ユーモリストたちの作品は、目に焼きついただけでなく、実際の発音を想起させる綴字の力で耳にも強い響きを残した。彼らの活動の中心は講演であり、そこでの語りの面白さ、魅力が人気の源であった。その語り口調をそのまま文字化した (しようとした) 結果生まれた作品の中にも、登場人物の生の声があり、講演者と聴衆のあいだの一体感、呼吸、リズムが生まれたのである。ある意味では、ここまで徹底した音の文字化、語りの紙上再現は、ユーモリストたちにとってはリアリズム追究の一つのアプローチであったのかもしれない。

実際に、読者の目と耳へのアピールは非常に効果的だったようで、Josh Billings の短編 “Essay on the mule” は、正しい綴字で発表した時には大失敗に終わったが、phonetic misspelling を用いて “Essa on the Muel” と題して出版し直したところ、またたく間に店頭から姿を消したという<sup>9)</sup>。

さらに、phonetic misspelling の多用は、その使用者 (発話者) が、非標準であること、または無教養であることを自ずからほのめかすことになった。結果、作者は自分の身につけるマスクとしての、あるいは自己の分身としての主人公 “fool character” の創造に成功した。主人公たちは、本からの学問とは無縁の無教養な人間で、笑われる存在ではあるが、形式



的なもの、権威を押しつけるものには立ち向う大衆の一員として、読者に身近な人物と写った。それが Browne の生んだ主人公 Artemus Ward であり、Locke の Petroleum Vesuvias Nasby であり、Shaw の Josh Billings なのである。そしてついには、作者自身が自分の創った “fool character” と同一視されるに至る。Browne ら literary comedian 以前のユーモリストたちも各々独得な主人公を生み出してはいるが、phonetic misspelling や方言の使用が不徹底であったため、“fool character” としての性格づけや笑いの質が不十分で、それだけ人気も劣ったようである。

But these (earlier dialect writers) had been surrounded by other characters who spoke English with facility and by authorial statements also in standard English, literary techniques which made readers understand that the author was socially and otherwise superior to dialect speakers. Thus, unlike the Civil War misspellers, these earlier dialect writers escaped the contempt, . . .<sup>10)</sup>

Browne ら literary comedian は、徹底して phonetic misspelling を用いることで、笑われ、あざけられる主人公たちと完全に一体化し、Shaw は髪をふり乱す Josh Billings として、Locke は揺りいすにゆられながら悪態をつく Petroleum Nasby として、Browne は、腹の出たはげ頭の見せ物小屋の主人 Artemus Ward として、読者に受け入れられていった。作者自身も、演壇に立つ時には、自分が生み出した主人公になりきって、いわばそのマスクをつけて、腕を振り上げ、髪をふり乱し、今でいうパフォーマンスを演じたのである。

しかし実際の作者たちは、けっして無教養な人物であったわけではない。Browne は判事の息子として生まれ、Locke は市会議員をつとめ、Shaw は議員の父を持ち大学教育まで受けた。何よりもジャーナリストとして働くうちに、標準英語や書きことばに親しんでいたはずである。どちらかという教養人の部類に属する彼らは、無教養な人物になりすますための工夫として、phonetic misspelling を多用したのである。作者と登場人物とを同一視する錯覚、ないしは作者のパーソナリティーの二面性こそが、彼

らの娯楽的ユーモアの根源となっていたのである。

無教養ぶりを強調されている“fool character”は、別の面でもユーモアに彩を添えている。先の引用例からもわかるように、19世紀ユーモリストたちの特徴の一つは、形式、権威を嫌い、現実的な思考や生活の知恵を重んじたことである。彼らの筆の調子は、形式主義に向った時、強い風刺の色合いを帯びる。読者の方も、威張った女権運動家の鼻柱がへし折られたり、強引に兵士を募ろうとする権力者がからかわれたり、古い伝統を重んじるヨーロッパ人が現実的なアメリカ人にやり込められたりする姿を見て、快感を覚えた。しかもその風刺や皮肉が、読者にとって身近な存在である“fool character”の口から発せられた時には、快感はひとしおであったはずである。ユーモリストの一人である Charles Henry Smith は、misspelling はユーモアのスパイスであると述べているが<sup>11)</sup>、まさにユーモアを強め、味わいを深めるための有効な工夫として phonetic misspelling の果たした役割は大きい。

権力に対する風刺という観点から眺めると、権力者側の人物の言葉までが誤字で表記されていることも意義深い。Browne の描く世界では、王も女王も大統領も、そして“fool character”も、語りは皆同様な誤字で表わされており、結果として権力者の権威が引きずり下されていることになる。王子ナポレオンもその犠牲者の一人である。“Interview with Napoleon”と題された短編の一部である。

“Since you air so solicitous about France and the Emperor, may I ask you how your own country is getting along?” sed Jerome, in a pleasant voice.

“It’s mixed,” I sed. “But I think we shall cum out all right.”

“Columbus, when he diskivered this magnificent continent, could hav had no idee of the grandeur it would one day assoom,” sed the Prints.<sup>12)</sup>

(アンダーラインは筆者による)

あくまでも、発音を文字の外見に写しとろうとする phonetic mis-

spelling の試みは、単なるふざけ、遊びの領域を越えて、ユーモアの本質にまで介入する力を秘めていたのである。

### 3. Mark Twain と phonetic misspelling

本名を Samuel Langhorne Clemens という Mark Twain は、1835年ミズーリ州の寒村フロリダで生まれた。12才で学校教育を離れて以来、“Jumping Frog” (1865) の短編で世に知られるようになるまで、植字工、新聞の通信員、水先案内人、雑誌記者という具合に、様々な生活体験をした。兄と共に大陸横断をし、金鉱探しをしたこともある。ジャーナリズムの世界に入ってから、講演活動も積極的に行い、Browne や Locke の後輩でもあった。出世作の“Jumping Frog” が、Browne の手を経て出版されたという経緯も考え合わせると、文学の流れの中で、Twain を Browne から literary comedian の後を継ぐ者として位置づけることが妥当だろう。

綴字の面においても、Twain が Browne らの phonetic misspelling を踏襲していたことがわかる文章がある。Mark Twain というペンネームが定まる前 Thomas Jefferson Sole という署名で新聞に載せた大変面白い手紙文である。

#### LEARNING GRAMMAR

Mr. Editor.—I have been sendin' my dater Nancy to a schoolmaster in this naborhood. Last Friday I went over to the school just to see how Nancy was gettin' along, and I sees things I didn't like by no means. The schoolmaster was larnin' her things entirely out of the line of eddycation and as I think improper. I set awhile in the schoolhouse and heered one class say their lesson. They was a spellen, and I thot spelled quite exceedingly. Then cum Nancy's turn to say her lesson—She said it very spry. I was shot! and determined she should leave that school. I have heered that grammer was an uncommon fine studdy, but I don't want any more gram-

mer about my house. The lesson that Nancy sed was nothin' but foolishhest kind uv talk, the ridiclessluy talk you ever seed. She got up and the first word she sed was

I love!

I looked rite at her hard for doing so improper but she went rite on and sed,

Thou lovest,

He loves,

and I reckon you never heard such a riggamyrole in your life—love, love, love, and nothing but love. She said one time;

I did love

Sez I, “Who did you love? Then the scolars laffed, but I wosn't to be put off, and I sed, “who did you love, Nancy? I want to know—who did you love? The schoolmaster, Mr. McQuillister, put in and said he would explane when Nancy finished the lesson. This sorter pacyfied me and Nancy went on with awful love talk. It got wus and wus every word.

I might could or would love

I stopped her again and I reckon I would see about that, and told her to walk out of that house. The schoolmaster tried to interfere, but I wouldn't let him say a word. He sed I was a fool and I nockt him down and make him hollar in short order.<sup>13)</sup>

1856年1月に、イリノイ州の地方紙 *Express Journal of the People* に載せられたもので、デビュー作 “The Dandy Frightening the Squatter” (1852) 発表後4年目の、Twain としては最も初期の作品に属するものである。

引用は全文の3分の2程であるが、一見してわかるように、dater (daughter), naborhood (neighborhood), eddycation (education), spellen (spelling), thot (thought), cum (come), を始めとして多数の phonetic

misspelling が全編に散らばっている。sed (said), uv (of) など Browne らの使用した綴字と同じものもかなりある。

さらに内容を考えてゆくと、この小品は、Browne らの踏襲というよりも、19世紀後半に見られた phonetic misspelling を利用したユーモアの典型とも呼べるであろう。娘の勉強ぶりを見学に出かけた語り手 Sole は、“I love, He loves,” といわゆる動詞の格変化ばかりを単調に繰り返す文法の授業に疑問を持つ。そして「一体何を愛しているのか。」と娘を問いつめ、動詞を実際使用过程中に対象物がいかに大切であるかを教師に食ってかかる。形式づくめで、現実性に乏しい文法の勉強と、誤字だらけで、一見無教養な語り手 Sole との対比が実に面白い。また文法ということばの形式と最も深く関わったテーマを、phonetic misspelling という形式を無視した文体で風刺しているため、文法に代表される形式主義、権威主義、非現実性に対する風刺の色合いは一層鋭く、またユーモラスになっている。その上、作者 Twain (Clemens) とは異った人物である語り手 Sole の、非常にくだけたリズムのある語り口調が生き生きと伝わり、現実的ではあるがやや気の荒い語り手の性格づけも見事に成されている。

Twain 自身は、学校教育はあまり受けていないにしても、様々な生活体験を通して、当然ながら標準英語、書きことばに対する認識は深かったはずである。その良い例として、イギリスでのインタビューの席上で、あまりきれいな英語を話すのでインタビュアーが驚いたというエピソードが残っているほどである<sup>14)</sup>。そうしてみると、この小品に見られる Twain の文体、phonetic misspelling の多用は、彼がさぐり当てたユーモアを伝えるための媒介だったといえよう。

Twain にまで影響を及ぼした phonetic misspelling を用いた文体の隆盛は、一種の社会現象として思わぬ方向に発展した。1903年、Bander Matthews の提唱、Andrew Carnegie の支金援助のもとで、National Simplified Spelling Board という委員会が出来たのである。冗談好きのアメリカ人のことであるから、当時注目を浴びていた文体に着目して茶化したもの、ふざけ、としての要素も皆無ではないだろう。しかし、発音されない語尾の“e”をとる、(love→lov)、発音されない“u”を落とす (honour→honor)、[f]音を表わす綴り“ph”は“f”に変える、など理論的にも妥当な綴字の簡素化を目指していたものであった。Twain は、

William James, David Star Jordan らと共に委員会のメンバーに選ばれ、簡素化された綴字、及び phonetic misspelling を擁護するようなスピーチを行っている。

I implore you to spell them in our simplified forms. Do this daily, constantly, persistently, for three months—only three months—it is all I ask. The infallible result?—victory, victory all down the line. For by that time all eyes here and above and below will have become adjusted to the change and in love with it, and the present clumsy and ragged forms will be grotesque to the eye and revolting to the soul. And we shall be rid of phthisis and phthisic and pneumonia and pneumatics and diphtheria and pterodactyl, and all those other insane words. . . .<sup>15)</sup>

スピーチの中で、Twain は、簡素化された綴字の重要性を感じたのは、“Considerations concerning the alleged subterranean holophotal extemporaneousness of the conchyliaceous superimbrication of the Ornithorhyncus, as foreshadowed by the unintelligibility of its plesiosaurian anisodactylous aspects” という驚くほど長いタイトルの文章依頼が来た時だという。当時、1語7セントの契約で文を書いていた Twain にとって、文字数の多い語は出来るだけ避けたかったし、同じ長さの文章を書くのならば、少しでも語数をふやして多くの収入を得ることが重要であった。運動への賛同は、こうした現実的な問題が切っ掛けだったというのである。この長いタイトルは、もちろん実際のものではなく、接頭語、接尾語を駆使し、文字数の多い単語の見本として、かなりオーバーに作られたものである。また、スピーチ自体にも、Twain 特有のほら話 (tall tale) 的要素や茶化しが含まれていることも否めない。

しかし Twain の綴字簡素化に対する態度はあくまでも明確で、簡素化された綴字を用いた手紙の一例を提示して、それによっても感情 (emotion) や事実 (fact) は十分に伝わるものだと強調している。「古い伝統を守って従来の綴字に固執することは、家の中に癌を巣食わせているような

ものだ。癌は取り除かなければならない。』<sup>16)</sup>ということばには、古いものにこだわり、新風を受け入れようとしない社会、特に出版界への痛烈な風刺も込められている。さらに語彙の選択にも触れて、“metropolis”の代わりには“city”を、“policeman”の代わりには“cop”をと、合理的なことばの使用を支持している。<sup>17)</sup>

Simplified Spelling の運動の主旨は、phonetic spelling のそれと全く同一のものではない。しかし、形式や権威に対抗し、現実的なものを追い求めるという精神的土台は共通のものであった。その土台の上に、語りを生かすための方言や誤字の利用、語彙の選択等々、ことばの持つ様々な要素が積み重なり、Twain の関心は、語りのことば、語りから生まれるユーモアへと集約されていったのである。

#### 4. 語りのユーモアと書きことば

語りとユーモアの関わりを考える時、最初に思い出されるのは、humorous story, comic story, witty story の違いについて Twain が書いた“*How To Tell a Story (1897)*”という短編の一節である。

There are several kinds of stories, but only one difficult kind—the humorous. I will talk mainly about that one. The humorous story is American, the comic story is English, the witty story is French. The humorous story depends for its effect upon the *manner* of the telling; the comic story and the witty story upon the *matter*.<sup>18)</sup>

comic story, witty story はともかく、humorous story は、話の中身ではなく話し方（語り方）が重要だという主旨の文章である。さらに、comic story を話す時には、これから面白い (funny) 話をする予告してよいが、humorous story を話す時には、あくまでもまじめくさって、話の中には面白いことなど何もないといった表情でなければならないとしている。いわゆるポーカー・フェースの必要性を説いているのだ。同様な発言が、オーストラリアでのインタビュー記事の中にも見られる。

I admit it is always difficult to reconcile any definition of the two kindred qualities; but by general, if tacit, consent Wit seems to be counted a very poor relation to Humour. I suppose that Pope was one of the wittiest writers who ever put pen to paper; and yet most of us agree that he was 'artificial.' Now, humour is never artificial.<sup>19)</sup>

人工的ではなく、あくまでも自然で、何の意図もないかのように思える語り方——その語りから生まれるユーモアこそが、Twain が最良と考える、アメリカ独得のユーモアなのである。

では、語りの中で生まれるユーモアは、書きことばの中にどのように生かされていったのであろうか。Twain は、様々な機会に、語りのことばと書きことばのつながりについて言及している。代表的な例が、“Fenimore Cooper's Literary Offenses”に見られる。Twain は書きことばの条件として (1) 会話は実際に話された通りに再現されなければならない。(2) 表現したいことに近いことば (cousin word) ではなく、ぴったりとしたことば (right word) を使用しなければならない。などを挙げた上で、Cooper の文章の欠点を手厳しく指摘している。

Cooper's word-sense was singularly dull. When a person has a poor ear for music he will flat and sharp right along without knowing it. He keeps near the tune, but it is *not* the tune. When a person has a poor ear for words, the result is a literery flattening and sharpening; you perceive what he is intending to say, but you also perceive that he doesn't say it. This is Cooper. He was not a word-musician.<sup>20)</sup>

Twain にとって、ことばとは音楽、音、すなわち語りのことばを意味するものであった。適格な音を捉えられない者からは、適格なことばは生まれない。どこかずれてしまう。つまり、ことばの持つ音の効果をつかむことが書きことばの第一歩だというのである。歌うが如く、語るが如く書くこと、それが Twain の究極の目的であったのだ。そのため、語りを再



現することばの選択は厳格でなければならない。そして、これぞ適語であるということばを活字の中に取り入れたときはじめて、語りのことばの持つ生き生きとした表情が生まれ、奥深い意味を伝えることができるのである。ことばの表情やリズムや活力が、Twain がいうところの “word music” であり、語りの音なのである。「right word は、文を創る者にとっての、また読む者にとっての道案内」なのである。この “right word” に出会った時、人は心の中で歓喜するだけでなく、身震いさえ感じるのだ。<sup>21)</sup>

語りのユーモア、語りの文学という点からみると、“Jumping Frog” の話は、やはり Twain の代表作と言えるのかもしれない。

作者とおぼしき「私」が Leonidas W. Smiley なる人物を捜しに鉱山へ出かけ、居酒屋で Simon Wheeler という老人に声をかけたために、老人のむだ話に耳を傾ける羽目になるという設定の話だ。飛び比べをする蛙の話は、アメリカ人にとっては目新しいものではなく、西部を中心に広まっていたほら話の一つである。しかし、そこに登場した語り手としての Wheeler 老人は、Twain が理想とするユーモアの語り手を具現化したような人物で、目的の尋ね人とは全く関係のない賭事の話をして、ポーカークラスで淡々と語り続ける。読者はいつしか彼の自然な語りのテクニクに引き込まれ、最後に、何の情報も得られず肩すかしをくったような「私」の姿に大笑いせざるを得ない。

“Rev. Leonidas W. H’m, Reverend Le—well, there was a feller here once by the name of *Jim* Smiley, in the winter of ’49—or maybe it was the spring of ’50—I don’t recollect exactly, somehow, though what makes me think it was one or the other is because I remember the big flume warn’t finished when he first come to the camp; but anyway, he was the curiouset man about always betting on anything that turned up you ever see, if he could get anybody to bet on the other side; and if he couldn’t he’d change sides.”<sup>22)</sup>

何もかも心得ていながら、何も知らぬふりをして、いかにも思い出しながら

ら話しをしているという風を装った Wheeler 老人の語り口調が自然に伝わり、数は少ないものの, feller (fellow), reg'lar (regular) 等の phonetic misspelling が、語りのリズムを生み出す役目を担っている。

phonetic misspelling は Twain がめざした right word の一つの形であり、その right word を礎にした語りの文学は、特に彼の短編の中で、脈々と息づいていたのである。

### お わ り に

19世紀も終わりに近づくと、Locke や Browne の姿は演壇から消え、彼らの主人公たちを特徴づけた妙な綴字も、次第に読者の記憶の中で薄らいでいった。綴字の簡素化を提唱した委員会も、これといった成果を見ないまま 1915 年には解散する運命をたどる。そうした時代の変化の中で、Twain 自身も Browne から 19 世紀のユーモリストたちの殻を打ち破ることになる。かつては、自信作の批評を依頼する程信頼していた Browne を、“mere humorist” として批判する立場になったのである。

I find Nasby, Artemus Ward, Yawcob Strauss... Josh Billings and a score of others, maybe two score, whose writings and sayings were once in everybody's mouth but are now heard of no more and are no longer mentioned....

Why have they perished? Because they were merely humorists. Humorists of the “mere” sort cannot survive. Humor is only a fragrance, a decoration. Often it is merely an odd trick of speech and of spelling, as in the case of Ward and Billings and Nasby and the “Disbanded Volunteer,” and presently the fashion passes and the fame along with it.<sup>23)</sup>

彼らは最早過去の人物であり、misspelling も、単なるしかけ (trick) の一つとしての意味を持つに過ぎなくなった。そして Twain は、彼らを越えて新しい語りと語りのユーモアを模索し続けたのである。しかし新しい語りは、ヨーロッパ旅行体験談である *The Innocents Abroad* (1869)

においても、また、主人公の世界を外側から眺めて語った *The Adventures of Tom Sawyer* (1876) においても、実現され得なかった。Twain が理想とする語りは、学校教育とは無縁であるが、生活の知恵に富み、自由を希求し、時に嘘をつきながらも、ポーカー・フェイスで気ままに語る少年ハックの登場をもって、始めて実現したのである。

*The Adventures of Huckleberry Finn* (1885) の中で極めて重要な地位を占めることばについて、Twain は冒頭の explanatory で注意を促している。これは、読者に対する説明というよりも、長い間自分自身に課していた、語りの文学、話しことばによる文学の実現への挑戦とも、またそれを成し遂げたという宣言とも受けとれることばである。

In this book a number of dialects are used, to wit: the Missoure negro dialect; the extremest form of the backwoods Southwestern dialect; the ordinary "Pike County" dialect; and four modified varieties of this last. The shadings have not been done in a haphazard fashion, or by guesswork; but painstakingly, and with the trustworthy guidance and support of personal familiarity with these several forms of speech.

I make this explanation for the reason that without it many readers would suppose that all these characters were trying to talk alike and not succeeding.<sup>24)</sup>

ここでいう dialect とは、もちろん単なる地方方言や階級方言ではなく、生きた語りを導くためのことばの全ての要素——phonetic misspelling, 口調, リズム, 語彙等——を総括的にとらえたものであろう。そして冒頭の一部をとっただけでも、彼の創作態度や意志が十分に反映していることがわかる。

Now the way that the book winds up is this: Tom and me found the money that the robbers hid in the cave, and it made us rich. We got six thousand dollars apiece—all gold. It was an awful sight of money when it was piled up. Well,

Judge Thatcher he took it and put it out at interest, and it fetched us a dollar a day apiece all the year round—more than a body could tell what to do with. The Widow Douglas she took me for her son, and allowed she would sivilize me; but it was rough living in the house all the time, considering how dismal regular and decent the widow was in all her ways; and so when I couldn't stand it no longer I lit out. I got into my old rags and my sugar-hogshead again, and was free and satisfied. But Tom Sawyer he hunted me up and said he was going to start a band of robbers, and I might join if I would go back to the widow and be respectable. So I went back.<sup>26)</sup>

単音節の語の繰り返し、単文の繰り返し。“Judge Thatcher he…”といった冗慢さを出すための代名詞の利用。“sivilise”という phonetic misspelling の工夫。こうした様々な要素が重なり合って、自然で生き生きとしたハックの語り口、ことばが生まれたのである。いわば、Twainの内なる声求め続けてきた全てを語り得ることば——語りと文学と人間とが一体化したことば——が誕生したのである。

Hemingway が、*The Adventures of Huckleberry Finn* は、アメリカ文学の源であると語る時、彼の関心は Twain の文体、ことばの上にあった。ハック少年の語りのことばは、確かにその後のアメリカ文学の根源であり、始まりでもあった。しかしそれと同時に、19世紀のユーモリストたちが追い求めた語りとユーモアと書きことばの融合という観点に立つと、その達成されたものとして、*The Adventures of Huckleberry Finn* を捉えることが可能である。その意味で、ユーモリストたちの妙な綴字 phonetic misspelling への傾倒は、アメリカ文学独得の語りを生むための、土台作りを果たしたといえるだろう。

[註]

- 1) Charles Farrar Browne, *Selected Works of Artemus Ward* (New York: Albert & Charles Boni, 1924), p. 169.

- 2) Walter Blair, *Native American Humor* (New York: Harper & Row, 1937), p. 122.
- 3) Brom Weber, "The Misspellers," *The Comic Imagination in American Literature*, ed. Louis D. Rubin, Jr. (New Brunswick: Rutgers University Press, 1973), p. 128. 同様に, Constance Rourke も "misspelling" という表現を用いている。 *American Humor* (New York: Harcourt Brace, 1931), p. 222.
- 4) Blair, *op. cit.*, p. 123.
- 5) Weber, *op. cit.*, p. 127.  
Lincoln は, Browne の作品を個人的に愛読しただけでなく, "High-Handed Outrage at Utica" という短編を, 会議の冒頭で朗読し, 自らの戒めにしたという。
- 6) Blair, *op. cit.*, p. 428.
- 7) *Ibid.*, p. 411.
- 8) その他, eye dialect としての記載があるものは, hed, frend, uthers の 3 語で, 「日常的な標準語をその標準発音に合わせて, 音声表記まがいの綴字で書き表わした語」と説明されている。
- 9) David B. Kesterson, "The Literary Comedians and the Language of Humor," *Studies in American Humor* vol. 1. No. 1. (June, 1982), p. 46.
- 10) Weber, *op. cit.*, p. 131.
- 11) Kesterson, *op. cit.*, p. 46.  
さらに, George Washington Cable は, misspelling は, ユーモリストにとってではなくてはならない遊び心 (playfulness) を伝える手段だと述べている。(同上)
- 12) Browne, *op. cit.*, p. 77.
- 13) Edgar M. Branch, "Did Sam Clemens Write 'Learning Grammar'?" *Studies in American Humor* vol. 2. No. 3. (Winter, 1983-84), pp. 201-202.
- 14) Brander Matthews, "Mark Twain and the Art of Writing," *Mark Twain: Selected Criticism*, ed. Arthurt L. Scott (Dallas: Southern Methodist University Press, 1955), pp. 160-161.
- 15) Samuel L. Clemens, *Mark Twain: Plymouth Rock and the Pilgrims and Other Salutary Platform Opinions*, ed Chales Neider (New York: Harper & Row, 1984), pp. 265-266.
- 16) *Ibid.*, pp. 269-270. 手紙の冒頭を引用しておく。  
Miss \_\_\_\_\_ dear freind I took some Close into the armerry and give them to you to Send too the suffrers out to California and i Hate to truble you but i got to have one of them Back it was a black oll wolle Shevyott With a jacket to Mach trimmed Kind of Fancy no 38 Burst measure and passy mentarry acrost the front....
- 17) *Ibid.*, p. 267.
- 18) Samuel L. Clemens, "How To Tell a Story" *The Writings of Mark Twain* vol. XXII (New York: Harper & Brothers, 1899), p. 8.
- 19) Louis J. Budd, "Mark Twain Talks Mostly About Humor and Humorists,"

- Studies in American Humor* vol. 1. No. 1. (April, 1974), p. 12.
- 20) Samuel L. Clemens, "Fenimore Cooper's Literary Offenses," *The Complete Humorous Sketches and Tales of Mark Twain*, ed. Charles Neider (New York: Doubleday & Company, 1961), p. 641.
- 21) Matthews, *op. cit.*, p. 172. 原文を引用しておく。  
Whenever we come upon one of those intensely right words in a book or a newspaper the resulting effect is physical as well as spiritual, and electrically prompt; it tingles exquisitely around through the walls of the mouth and tastes as tart and crisp and good as the autumn-butter that creams the sumac-berry.
- 22) Samuel L. Clemens, "The Notorious Jumping Frog of Calaveras County," *The Complete Short Stories of Mark Twain*, ed. Charles Neider (New York: Doubleday & Company, 1957), p. 2.
- 23) Samuel L. Clemens, *The Autobiography of Mark Twain*, ed. Charles Neider (New York: Harper & Row, 1917), p. 297.
- 24) Samuel L. Clemens, *The Adventures of Huckleberry Finn*, *The Writings of Mark Twain* vol. XIII (v).
- 25) *Ibid.*, p. 15.